

## 戦争が生んだ私の人生

長野県 浜 平次郎

私は旧落合村の農家の六人兄弟の二男として生まれ、落合尋常高等小学校を卒業すると、東京神田の電気専門学校に入学しました。当時は大東亜の共栄圏確立と言うことで、新天地・満蒙の開拓に国は重点を置き、全国から青少年を募集して、茨城県の内原の日輪兵舎で一カ年の訓練の上、満蒙青少年義勇軍として満州の大地に送っていたのです。

私も国土の狭い日本よりも、満州の大地を夢見て、電気学校を中退して第二次先遣隊として落合村開拓団に入植することを心に決め、昭和十七（一九四二）年二月七日、生まれ故郷の近所の方々、友人達に別れを告げ、舞鶴港より出航、大連に上陸、ここから満鉄にて二竜山駅に下車、トラックに乗って二竜山農場に到着しました。この農場は

八ヶ丘農場の分場でした。

初めて夢にまで見ていた満州の広野、農場の農地は畑作のみで水田は有りませんでした。私達開拓団員は約三十人で、早速各班十人ほどに編成され宿舎に入りました。

明日から開拓団に入植してからの事柄等の訓練を受けることとなりました。起床は午前六時、宿舎の前の広場に整列、点呼、体調の良否等を確認して軽い体操をし終わる頃、東の空には今まで見たこともない真赤な大きな太陽が地平線のかなたから昇って来ました。何とも言えない雄大な気持ちになりました。

朝食は七時、作業開始が八時、各班ごとに作業が分担され、主として高粱やトウモロコシ等の作付準備の畦造りでした。一枚の畑の区画が五十町歩、畦の長さは約五、六百メートル、農道の広さは約三十メートルと言った内地では考えられない広さでした。

午前中に一畦行つて帰つて来ると昼食時間にな

ります。農場の外は荒れた原野で、時々野鹿（ノロ）が農場の作物を食べに来るので、野鹿撃ちの時間も有りました。しかしなかなか単発の鉄砲では、野鹿の逃げ足が早く当たらないということでは、

この農場で二カ月間ほど訓練をして、四月下旬、北安省徳都県旭日開拓団に行きました。そして開拓団の事務所周辺の土壁造りとか、道路造りとかの仕事が日課です。

ここで独立して一人約十町歩の農場を与えられるのは夫婦でなければ認定されませんので、昭和十九年五月に、同じ開拓団として渡満していた花嫁さんを世話して頂き、いよいよ満州の新天地に骨を埋める覚悟を決めたのです。

結婚式は開拓団の事務室の二階で、所長さんの仲人で行いました。当分の間、開拓団の仕事をしておりましたところ、昭和十九年七月、現地で徴兵検査が実施され、第一乙種合格となり、同年十月十日、新妻を残し、鞍山の第一三〇四野戦高

射砲連隊第三中隊に入隊となりました。私は観測班に編成となり、高射砲は口径一五センチで高度到達距離は高度五千メートル程度でした。

一応、一期教育は歩兵の基本教育と敵機に対する高度観測等で三カ月ほど訓練を重ね、一期検閲を終了すると昭和二十年七月、鮮満国境を通過して朝鮮の羅津市に到着しました。羅津の街には部隊本部が在って本部転属となりました。羅津には他の部隊も駐屯していました。

この街に来て感心したことは、新しい羅津の都市計画が出来ていて、市の公共施設を中心に放射線状に道路が造られ、商業区画、住宅地区とに区画され、すでに道路は出来ていました。日本の京都の街造りを参考にしたものだろうと思いました。本部に来てからも毎日、想定敵機ソ連機に対するの猛訓練をしておりましたが、八月十五日終戦となったのでした。

情報によれば満州にいた部隊のほとんどは、皆シベリヤに連れて行かれたと云う話でしたので、

私達の部隊は部隊長以下全員三百人ほどは、ソ連兵に捕虜になるのなら逃げようと、集団で逃避行を決心しました。しかし白岩と云う所で全員捕まってしまう。八月二十八日でした。そして北朝鮮の古茂山収容所へ捕虜として収容されたのです。

私達が収容された時は他の部隊の方々もおり、全部で千人ほどはいたようでした。宿舎は、将校には元小野田セメント会社の社宅に、奥さんのいる方は同居し、我々兵隊は土を掘って穴倉を造り、そこを宿舎にしておりました。

別に重労働の使役とはなく、宿舎周辺の草むしりなどで、食事は家畜の飼料同様な高粱等が主食、初めは胃腸を悪くした者も大分いましたが、どうすることも出来ませんでした。このような生活を一年半ほどして、この収容所は撤収となり、二月十五日、古茂山収容所を出発、二月十八日興南収容所へ入所となりました。いよいよ祖国へ復員のためここで復員船を待つことになったのです。

三月十八日、私達部隊は興南港を出発し、三月二十三日佐世保港に上陸し、検疫のため一週間ほど滞在、各々我が家への帰路についたのです。

私は、この身は新天地満州に骨を埋める覚悟で渡満したのですが、夢が破れた焦心の身で生家へ帰ったのです。昭和二十二年四月八日でした。

自分は帰ったが妻は迎えに出ていないので気になって「どうしたの」と聞きますと、妻は引揚者として二年も前に帰って来たのだが、私が入隊してからはいつ帰れるかも知れず、また帰る保証も出来ないのです、若い身で可哀想だと両家の親族一同相談して再婚することにして他家へ嫁いだと言うことでした。私はただ感無量と言った気持ちで納得せざるを得ませんでした。

これも戦争の起した人生の悲劇であったのです。生家に戻って見れば、長兄は南方で戦死し、私が生家の後継ぎとしてしばらく家業の農業をやっておりましたが、以前電気学校に入学したことがあるので、信濃電気㈱に就職し、昭和六十年に定年

を迎え退社し、現在に至っております。